

Postsyntactic Compound

— 先行分析とその問題点

Postsyntactic Compound

— Previous Analyses and Their Problems

森 田 順 也

Junya MORITA

1. はじめに

複合を含む派生形態過程（語形成）は語彙部門で行われるとする、語彙主義（lexicalism）が1980年代中頃まで生成文法家の主流を占めていたが（Di Sciullo and Williams（1987））、その後、語形成が統語部門で行われることを示す各種の証拠が提示されると、主要な語形成を統語部門に据える反語彙主義（antilexicalism）が現在では主流を成すように思える（Embick（2010））。Shibatani and Kageyama（1988）によって最初に導入された日本語のPostsyntactic compound（統語論の後で作られる複合語）は、そのような証拠として重要な意義を持つ。本稿の目的は、Shibatani and Kageyama（1988）等が明らかにした当該複合語の特性を整理し、その問題点・課題を示すことによって、語形成と他の部門、とりわけ統語論との関係はどうあるべきかを論ずることにある。

以下、第2節で、Shibatani and Kageyama（1988）、影山・柴谷（1989）が指摘する当該複合語の各種の特質をまとめ、その問題点及び今後の課題を明示する。第3節では、影山（1993）が示す新たな特性を概略し、その疑問点・課題を例示する。第4節では、Kageyama（2009）、Kageyama（2013）が提案する W^+ 範疇を概観した後で、同提案を短評する。

2. Shibatani and Kageyama（1988）、影山・柴谷（1989）

Postsyntactic compoundを詳細に論じているものに、Shibatani and Kageyama（1988）（以下、S & K）、影山・柴谷（1989）がある。両研究の議論は重複することが多いので、本節ではS & Kをベースとしてその骨子をまとめ、影山・柴谷（1989）を使って適宜補充する。最初に当該複合の一般的特徴を概観し、続いて語の特性及び非語彙的特性について順次見ていく。

2.1. S構造複合

「新婚旅行」のような語彙的複合語は、アクセントの山を一つしか持たずに一息で発音される。これに対して(1)のように、構成要素が各々のアクセントを伴い、間に幾分の切れ目（“：”でマークする）を置いて発音されるタイプの複合語も存在する。このタイプの複合語は、語彙部

門でなく、統語部門あるいは音韻部門で形成される。後で議論するように、S & K 及び影山・柴谷（1989）は当該複合を音韻部門に位置付けるのに対して、影山（1993）は統語部門の最終段階（S 構造）に位置付ける。本稿では影山（1993）に従って、当該複合語を Postsyntactic compound ではなく、S 構造複合語と呼ぶことにする。

- (1) [新空港：建設] に反対する。 (影山・柴谷（1989: 141）)

次に、同複合語の構成素について考えてみよう。後項は、漢語VN（動名詞、一般に「する」と結合して動詞になるもの）（(1)）、または和語複合動詞の連用形（(2a)）に限られる。（2b）のように後項が和語単純動詞の連用形の場合は、S 構造複合語になれない¹⁾。

- (2) a. [図書：貸し出し]（和語複合動詞の連用形） (影山・柴谷（1989: 149）)

- b. *[図書：貸し]（和語単純動詞の連用形） (影山・柴谷（1989: 149）)

前項は、述語を表わす後項に対して、主語（e.g. [受験生：増加]）、対格目的語、与格目的語（[部長：昇進]）という文法関係を表す²⁾。

2.2. 語の特性

S 構造複合語の顕著な特徴として、語の特性と統語的特性を兼ね備えている点が挙げられる。語の特性としては、次の4点が指摘できる。

第一の特性は、格助詞の排除である。（3）に見るようなS 構造複合語に、格助詞の「を」や「の」を挿入することはできない³⁾。格助詞がS 構造複合語に生起できないことは、「内部要素の名詞屈折の排除」という複合語一般の特徴を示している（cf. ボール（*を）投げ、郵便（#の）配達（影山・柴谷（1989: 143）））。

- (3) a. [中国：訪問] の際 (S & K, p. 461)

- b. [新空港：建設] に反対する (影山・柴谷（1989: 141）)

次に、「形態的緊密性」が挙げられる。（4）のように、S 構造複合語への統語表現の介入は許されない。このことは、「X⁰の内部に統語表現は現れない」という語の特性を示している。

- (4) *[ヨーロッパ：のんびり：旅行] 中に… (S & K, p. 462)

第三の特性は二又構造に係るものである。「*子ども－たこ－上げ」のように、3つ以上の枝分れは形態的構造では禁じられる。S 構造複合語についても同様であることから（(5)）、同表現の語の特性が示される。

- (5) *[漱石：シェイクスピア：研究] 中に… (S & K, p. 462)

最後に、「構成素間の語種の制限」という語彙的特異性が見られる。例えば、「[書籍：購入]の際」と異なり「*[本：購入]の際」は容認されない（S & K, p. 466）。これは、後者の複合語が本来語と非本来語から構成されるからである。

以上の諸点から、S 構造複合語は語の一般的特性を持ち、従って単なる助詞の省略形ではなく、正当な語であることが確認される⁴⁾。

2.3. 非語彙的特性

当該表現が、語彙部門ではなく、統語構造に基づいて統語（後）の部門で形成されることを示す特性がある。以下、8つの特性を挙げる。最初の3つは、統語構造との形態統語的、意味的、

及び音声的平行性に関するものである。第一に、(6) (7)に見る通り、基底の統語構造が不適格なら複合語も不適格になる、という形態統語的平行性が指摘できる。(7)において、S構造複合語に関与できる基体動詞は複合動詞に限られ、単純動詞は不可である点に注意されたい。統語構造に基づいて複合語が作られると仮定すれば、上記の平行性は自然に捉えられる。

- (6) a. *[家族とのヨーロッパを旅行]_Sの折に …
 b. *家族との [ヨーロッパ：旅行]_Nの折に … (S & K, p. 468)
- (7) *[図書の貸し]_{NP} — *[図書：貸し]_N
 (cf. [図書の貸し出し]_{NP} — [図書：貸し出し]_N) (影山・柴谷 (1989: 149))

2点目は、意味的平行性である (S & K, p. 478)。語彙的複合語「家庭訪問」は、「学外での生徒の様子を知る目的で担任の先生が生徒の家を計画して訪問する」といった特殊な意味を持つ。これに対してS構造複合語 [家庭：訪問]及び対応する統語表現は、「誰かの家を訪問する」といった透明な意味を表わす。ここでも、統語構造に基づきS構造複合語が形成されれば、意味的平行性は自然に導かれる。3点目は、統語表現とそのS構造複合語の音声面での関連性である。(8)に記すように、双方のアクセント型はパラレルである。そこで、句アクセントが与えられた後に当該複合が行われると仮定すれば、この音声的平行性は無理なく説明できる。

- (8) a. じゅけんせいのどうかに伴い …
 b. [じゅけんせい：どうか]に伴い … (影山・柴谷 (1989: 149))

4番目の非語彙的特性は、前項の条件に関するものである。(9)に見るように、前項は(非対格VNの)主格、対格、与格が与えられる要素に制限される。

- (9) a. [受験生：増加], [新大陸：発見], 山田氏の [部長：昇進]
 (影山・柴谷 (1989: 154))
- b. *[電算機：計算] 中, *[アメリカ：帰国] 後 (S & K, p. 470)

一方、語彙的複合語にはそのような制限は課されない (cf. 鉛筆書き, 外国帰り)。語彙的複合語は、しばしば語用論的に解釈され、基底の統語構造から直接的に記号化されるのではない。以上の事実を捉えるためには、「統語的複合は、基本語順において動詞に適性統率され格を与えられた項に適用する」という原則を仮定する必要がある (影山・柴谷 (1989: 156))。それ故S構造複合語は、語彙的複合語と異なり、語彙部門では形成されない。

以下に指摘する3つの特性は、統語的要素の複合語内の生起に関するものである。第5の統語的特性として、S構造複合が主語敬語化の後に適用される事実が挙げられる。例(10)に代表されるように、文構造の主語に言及する尊敬接辞「ご／お」は、S構造複合語内に生起できるが、語彙的複合語内にはできない。従って敬語化の統語的出力構造に、S構造複合が適用される。

- (10) 上田先生が [ヨーロッパ：ご旅行] 中に ⇔ *先生は [新婚ご旅行] に出かけられた
 (S & K, p. 474)

句の包摂が限定的に可能である点が、6番目の統語的特質である。一般に語には、「構成要素が句修飾語を持つてはならない」という制約 (No phrase constraint) が課せられる (*[[大きな馬]_{NP} 乗り]_N)。これに対しS構造複合語の場合には、指示詞的修飾語と限定修飾語が生起できる ([[この実験]：終了] 後に, [[今やっている実験]：終了] 後に) (S & K, pp. 471-472)。

この事実も、統語構造を基にしてS構造複合が行われると考えれば、無理なく説明できる。

7番目の統語的特質は、「照応の島」の制約にまつわるものである。同制約一語の要素は外部要素と照応関係を持つてはならない一は、(11)に見る通り語彙の複合には成り立つが、S構造複合には成り立たない。

- (11) a. *アメリカでは [中古車_i 販売] をする時は、それら_iに保証をつけなければならない。
b. 太郎は先日、[中古車_i : 販売] の際に、それら_iの一台をこわしてしまった。

(S & K, p. 473)

同制約を、語一般の制約でなく語彙部門の制約と考え、かつS構造複合は統語部門に帰属すると仮定すれば、上記の事実は自然に捉えられる。

最後の統語的特質は、S構造複合が語彙部門の操作に給与しないことである。語彙の接辞は、語彙の複合語に付加するが（[非 [インドヨーロッパ系－言語]]）、S構造複合語には付加しない（*[非 [アジア：軍事化]]）（影山・柴谷（1989: 152））。この事実も、S構造複合語を統語（以降の）部門で作ることの帰結となる⁵⁾。

2.4. 提案

前記の観察に基づき、S構造複合に対する2種類の生成方法が各々、S & K (p. 458)、影山・柴谷（1989: 155）で提案されている。最初のものは、時を表わす節を基底構造としてS構造複合語を派生させる方法である。(12)に例示されているように、非主要部名詞句の格助詞の省略及び主要部への編入によって、基底構造 (12a) からS構造複合語表現 (12b) が派生される⁶⁾。

- (12) a. [[[[家内が]_{NP}[[アメリカを]_{NP} [訪問]_{VN}]_{VP}]_S]_{NP} [(の) 折/中]_N]_{NP} →
b. [[[[家内が]_{NP}[[アメリカ：訪問]_{VN}]_{VP}]_S]_{NP} [(の) 折/中]_N]_{NP}

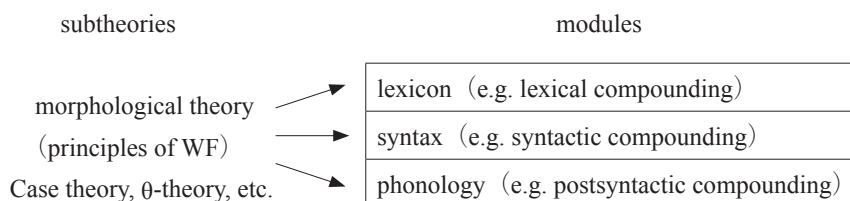
影山・柴谷（1989: 155）は、基底環境を拡大し、名詞句構造を基底構造としてS構造複合語を派生させる方法も提案している。(13)には、名詞句形成と対比されたS構造複合語形成が例示されている。当該複合語は、格を付与された非主要部名詞句（受験生）が主要部（増加）に編入して形成される。名詞句から「の」を削除することによってS構造複合語が作られるのではない点に、特に注意しておきたい。

(13)

	S構造複合語形成	名詞句形成
	[受験生 増加] _{NP}	[受験生 増加] _{NP}
格付与	<主格>	<主格>
複合化	[受験生：増加] _N	……………
「の」挿入	……………	受験生の増加

上記のS構造複合の分析を踏まえると、文法全体における語形成の位置づけがはっきり現れてくる。即ち語形成部門と他の部門との関係は、(14)で図示されるような、「モジュラー語形成」としてまとめることができる（S & K, p. 481）。本モデルでは、語形成は語彙部門だけでなく統語部門及び音韻部門でも行われる。また、語の適格性を規制する各種の語形成の原則は、各部門とは独立した1つの下位理論（subtheory）を構成する。

(14)



この枠組みでは、先に見た S 構造複合語の語の性質は形態理論で、非語彙的性質は統語論または音韻論で捉えることができる。

2.5. 問題点及び課題

当該論文の問題点・課題として、以下の3点を指摘したい。前節で例示した通り、S & K 及び影山・柴谷 (1988) の研究は、S 構造複合に着目し、同複合の多岐に渡る特性を明るみに出した点で極めて興味深い。語彙的及び統語的特性の両面を合わせ持つという、当該複合のユニークな特徴が浮き彫りにされている。統語的・語彙的特性の一部は (15) のように整理できるが、両研究によると、当該複合が統語的特性 (i) (ii) を持つのはそれが統語レベルで行われるからであり、語彙的特性 (iii) (iv) を有するのは形態理論の制約に起因する。

(15)	統語的	語彙的
(i) 「照応の島」の制約を受けない	○	
(ii) 句の包摂が可能	○	
(iii) 形態的緊密性—VN 主要部に付加詞は付かない		○
(iv) 語彙的特異性—構成素間に語種の制限がある		○

しかしながら、一群の統語的特性と語彙的特性がなぜこのような群れを形成するのか説明ができない、という問題が生じる。S & K (p. 481) は、「照応の島」の制約は語彙モジュールのみで適用されるので、統語生成の S 構造複合語はこの制約を受けないと述べている。これと同様に形態的緊密性も、語彙モジュールのみで適用されるとみなしても不思議ではない。その結果、「*[ヨーロッパ: 退屈な旅行] 中に」類の S 構造複合語表現は、事実反して容認可能と予測されてしまう。そこでこの場合は、語彙部門の性質ではなく、形態理論が管轄する語 (X^0) 一般の性質とみなすことになるが、なぜそうなるのか説明がつかない。(ii) の句の包摂の制限については、「 X^0 内に句は生起できない」という、 X^0 に課せられる形態理論内の制約と考えることもできる (Baker (1988: 71-72))。そうすると S & K の分析では、句の包摂表現「[[この実験]: 終了] 後に」は容認不可と予測されてしまうので、当制約を今度は、形態理論でなく、語彙部門に委ねることになる。以上のことから、関連する制限が語彙モジュールと形態理論のどちらに帰属するのかを、正しく予測できる要因を解明していくことが求められる。

次に、2.2 節と 2.3 節の議論から既に察せられるように、S 構造複合語の統語的特性に比べて、語彙的特性の指摘は少なく、語彙的証拠はそれだけ弱いと言える。加えて、二又構造に係る特性のように、現在では語彙的特性と言いつくしているものや、本稿では取り上げなかったが、「第一姉妹の原則」に係る特性のように、語の特性を示す証拠となるかどうかははっきり

しない事例もある⁷⁾。こうした事情からHoriuchi (2005)は、上述の語彙的特性の各々に異を唱えながら、当該表現は複合語ではなく、格助詞が省略された句の一部であると主張している。この種の研究に反論するためにも、当該表現が語の性質を備えていることを示す明確かつ決定的な証拠が求められる。

最後に、提案されたモジュラー語形成では、形態理論の原則に従っていれば統語部門や音韻部門でも自由に語形成を行ってよいことになる。しかるに、語形成は基本的には語彙部門で行われ、他の部門とりわけ音韻部門で語を形成するのは有標な(marked)な現象とみられる。従って、そのような特殊な語形成様式がどのような場合になぜ可能になるのかを、明示することが肝要である。

3. 影山 (1993)

3.1. 要点

影山 (1993) は、これまで提案されたS構造複合に関する分析を基本的に踏襲しつつ、新たな見解を加えて修正分析を提示している。また、S構造複合に属する新たな語形成パターンを指摘しながら同現象の対象を広げるとともに、関連現象にも言及しながら当該現象をより広い視点から捉えようとしている。

以下では、S構造複合に関する前記の特質群の再言は避け、特筆すべき新たな見解のみを記す。新見解は、5つにまとめることができる。

第一は、前項の意味的制限に関するものである。前節で既に触れた通り、前項が指示機能ないし限定機能を持つ修飾語句を伴う名詞の場合、S構造複合が受け入れられる傾向がある(16)。

(16) a. [清水氏の発言：終了] 後 … (影山 (1993: 224))

b. [かのマゼラン海峡：通過] の際 … (影山 (1993: 225))

他方、(17)のように、対象を描写する修飾語句を伴う名詞の場合は、主要部への編入は困難である。この制限—前項は対象を描写しない—が、新たに明記されたものである。

(17) a. [?]*[あこがれのヨーロッパ：旅行] 中に …

b. [?]*[世界一空気の悪いメキシコシティ：出張] の折 … (影山 (1993: 224))

関連した意味条件として、S構造複合語全体が陳述性を示さないことが挙げられる。例(18)を見よう。同じS構造複合語でも、生起文脈に応じてその成否が分かれる点が興味深い。

(18) a. *[浅間山：爆発] が一週間も続いた。

b. [浅間山：爆発] のニュースが報道された。 (影山 (1993: 250))

(18a)の複合語は、今行われている過程を描写しているので陳述性が高い。陳述性は、本来的に名詞的概念を表わすS構造複合語と相反する。(18a)が不可なのは、このためである。一方(18b)の場合は、特定の出来事を事実として提示しているので陳述性は低い。従って(18b)のような環境に現れる複合語は、容認可能となる。

第三に、後項(主要部)の制限が観察される。例文(19)と(20)の対比から分かるように、和語複合名詞が当該複合語の後項に生起できるのは、対応する複合動詞が存在する場合に限られる。

(19) 図書を持ち出しの際は … → [図書：持ち出し] は … (影山 (1993: 237))

(20) a. *盗品を売り買いの場合は… → *[盗品：売り買い]を…

b. *専門書を斜め読み中に… → *[専門書：斜め読み]は… (影山 (1993: 237))

(19)の「持ち出し」と異なり、(20)の「売り買い」及び「斜め読み」は、複合動詞に直接由来するものでないので (cf. *売り買う, *斜め読む) 格を保持しない。その結果、「売り買い」類の複合名詞は、前項の格の条件—主格・対格・与格が与えられる要素に制限される—を満たすことができないので、S構造複合語の主要部にはなれない⁸⁾。

第四の新見解は、当該複合語の生成レベルにまつわるものである。当該複合語が文法のどのレベルで作られるかに関して、S & K (pp. 480-481) 及び影山・柴谷 (1989: 149) では、統語後、即ち音韻部門で生成されると主張されている。影山 (1993: 210-211) は、これを改め、統語部門の最終段階であるS構造で生成されるべきであると論じている。

第五の興味深い見解は、S構造複合の拡張である。次の3つのケースがS構造複合に該当することが、形態的・統語的観点から示される。最初に(21)に見る通り、主要部が形容名詞の場合にもS構造複合が成り立ちうる。

(21) a. 日本語に固有の特徴 → [日本語：固有]の特徴

b. 審議が不十分につき… → [審議：不十分]につき… (影山 (1993: 241))

次に(22)に記すように、主要部和語動詞が「-さ」の接辞付加を受ける時にも、S構造複合が可能である。

(22) a. 男は、酒代が欲しさに… → 男は[酒代：欲しさ]に…

b. 東大に入りたさのあまり… → [東大：入りたさ]のあまり… (影山 (1993: 246))

同様に(23)から、非主要部が「-的」形容名詞の場合に主要部に編入して、S構造複合語を形成することが分かる。

(23) a. 庶民的な性格 → [庶民的：性格]

b. 積極的な支持 → [積極的：支持] (影山 (1993: 372))

3.2. 問題点及び課題

上記の5つのポイントについて、問題点あるいは今後の課題を簡潔に述べる。第一のポイントは、S構造複合語の前項は指示機能ないし限定機能を持つ修飾語句を含む句になりうるが、描写の修飾語句を含む句にはなれないという意味的制限であった。この特質は、当該表現が単なる「の」の省略形ではなく、語であることを示す強い証拠になりうる点で重要である。但し今後の課題として、限定と描写という概念を明確に区別する必要があるだろう。簡単な例を示せば、「[定紋入りの注文品：生産]の際に」というS構造複合語内の修飾語「定紋入りの」は、限定か描写か十分明らかでない。さらに、句の包摂の可能性について詳細な事実観察を行った上で、修飾語句によるこの種の容認性の差異がなぜ生じるのかを説明する必要がある。第二のポイント—陳述性の排除—についても、同様なことが言えるであろう。

次に第三の見解—和語複合名詞の制限—の考察に移ろう。S構造複合語の主要部になれる和語複合名詞は、対応する複合動詞が存在するものに限られる、ということであった。しかしながら(24)の実例が示すように、問題の制限が破られる場合もあるので、この種の反例がなぜ生じるのか説明が求められる⁹⁾。

(24) a. 中古店での「書籍：安売り」は…

b. 「問題：先送り」の末に公的資金投入額を膨らませた。

(「現代日本語書き言葉均衡コーパス」)

第四の、当該複合語の生成レベルの問題については、4節で詳しく検討する。最後に、各種のS構造複合語の関係について。本稿で議論しているタイプのS構造複合語と比べると、他の3つのタイプのものは統語的性質が弱いと言える。その上、後者のタイプに属する構文間でも統語的特性に差異が認められる。例えば句の包摂の可能性については、(25)に見るように、各構文間で違いがあるように思われる。これらの統語的差異が何に由来するかを説明するために、一連のサブ構文を関連づけるような分析が望まれる。

(25) a. 「声楽の道を途中で挫折した者：特有」の(実例)

b. ^{??}「英語教育を重視する大学：入りたさ」のあまり

c. [?]「極めて庶民的：性格」

4. Kageyama (2009), Kageyama (2013)

4.1. 要点

Kageyama (2009) 及び Kageyama (2013) は、Word⁺ (W⁺) という形態的範疇に注目し、関連する各種の派生語及び複合語を詳細に分析している¹⁰⁾。W⁺ 範疇を議論の要として、「S構造複合は一般的な統語的編入プロセスに属する」という立場を明確にすることが、両論文の趣旨と言える。S構造複合が統語レベルで行われ、かつ編入現象であるという見解には、それぞれ障害がある。各障害がどのように解消されるかを、以下に略述する。

まず始めに、W⁺ という範疇の特徴を概観しよう。日本語には (26) 代表されるような、漢語接頭辞付き派生語とある種の複合語が存在する。

(26) a. 前 | 大統領 現 | 会長 各 | 大学 (Kageyama (2013: 366))

b. 貿易会社 | 社長 第20回 | JKコンファランス (Kageyama (2013: 368))

各例において、接頭辞と基体の間、または複合語の構成素間に短いポーズがあり (“|” で表わす)、句に似たアクセント型が示される。また、「今の」「現在の」といった限定詞の意味を持つ点や、(27) のように「島の制約」一語内の要素が統語的要素と照応関係を持つてはならないに従わない点で、当該複合語は統語的である。同複合語がこのような統語的諸特徴示す一方で、語の内部要素に機能範疇が現れない等の語彙的性質も保持している (e.g. [私立 (*の) 大学 | 教授])。

(27) 大統領は明日友好条約_iに調印する予定だ。[_{w+} 同条約_i | 最終案] によると…

(Kageyama (2009: 520))

以上の点から、(28) に記すような範疇の普遍的目録を仮定することができる。

(28) Root < Word < Word⁺ < Phrase < Sentence (Kageyama (2013: 367))

Word⁺ は Word と Phrase の中間に位置するので、語彙レベルと統語レベルの両方に参与できる。語彙レベル形成の例が (26b) のような述語-項の関係を表わさない語彙的複合語であり (e.g. [貿易会社 | 社長]_{w+})、統語レベル形成の例が S 構造複合語 ([ヨーロッパ | 訪問]_{w+}) に相当し、両者は同一の発音型を持つとみなされる。語彙的複合は S 構造複合と異なり、主語敬語化

等の統語的特性を欠くので (cf. *[免税品 | ご購入客]_{W+}), 語彙部門に据えられる。

W^+ 範疇を仮定すると, S 構造複合語の統語的生成への道が開かれる。S 構造複合を音韻部門に据える根拠は, 同複合語と対応する統語表現のアクセントの平行性にある (cf. 2. 3 節の (8))。句アクセントの付与の後に当該複合が行われると仮定すれば, この音声的平行性は自然に捉えられる。句アクセントの付与は統語後の音韻部門で行われるのだから, 当該複合も当然, 音韻部門で行われることになる。一方, W^+ 範疇が与えられると, S 構造複合の句的なアクセントの特質を同複合化から分離させ, W^+ 一般の特質とすることが可能になる。即ち, 語彙部門または統語部門で形成された W^+ レベルの複合語や派生語に, 音韻部門で W^+ 特有のアクセントが付与されることになる。その結果, S 構造複合語を音韻部門で形成する必要はなくなる。それでは W^+ 語が句アクセントに近い性質を示すのはなぜかという点, W^+ は Word よりもその構成素間の境界が広いので, 句に似たポーズとアクセントで発音されるからである。

「S 構造複合は編入現象である」という議論に移ろう。既に 2. 3 節で示したように, S 構造複合が構造関係の制約—前項は主要部に適正統率され格を付与される項に限られる—に従って行われること, とりわけ他動詞の主語は編入できないという普遍的制約に従っている点で (cf. Baker (1988)), 当該複合は編入現象の顕著な特性を示している。一方で類型論の見地から同複合を眺めると, S 構造複合を編入現象とする主張には, 一見問題が生じる。文法関係, とりわけ主要部—項関係の標示の仕方に関して, 言語は類型論的に 2 つのタイプに分かれる。(但し, 段階性が認められる。) 即ち, 従属部を標示する型 (dependent-marking, DM) と, 主要部を標示する型 (head-marking, HM) の 2 種類に分類される (Nichols (1986))。HM タイプの主要な特徴の 1 つは, 編入により語形成が行われることである。ところで日本語では, 主格や目的格は動詞の項に標示され, 動詞自体にはマークされないため, 日本語は一般に DM タイプと言われている。そうすると, DM タイプの日本語の S 構造複合語が編入によって形成されるという見解には, 類型論上問題が生じることになる。

そこで, 日本語は完全に DM タイプというわけではなく, HM タイプの性質も備えていることを明示することによって障害を取り除く。即ち日本語は, 形態意味的観点から見れば, HM 言語の特徴を有することを示す。証拠となる事例として, 主語・目的語尊敬化, 動詞による項の情報の指定, ある種の項—主要部の呼応が主要部に標示されること, などが挙げられる。例えば, 主語尊敬化表現「(先生が) お帰りです」(Kageyama (2013: 379)) において, 主語に対する敬意が, 動詞接頭辞「お」によってマークされている。

4. 2. 問題点及び課題

当該論文の根幹を成す W^+ 範疇にまつわる疑問点として, 以下の 3 点を指摘したい。最初は, 音声的ポーズに関するものである。[前 | 大統領], [貿易会社 | 社長] のような W^+ レベルの語彙的複雑語の構成素間のポーズと, [ヨーロッパ: 訪問] のような S 構造複合語の構成素間のポーズについて, 影山 (1993: 338-346) では両者を区別しているように見えるが, Kageyama (2009)・Kageyama (2013) では両者を同じものとみなし, 双方に共通のポーズ“|”を付与する。これを根拠にして後者の研究は, W^+ という共通の範疇を持つものとして両タイプの複雑語を関係づける。しかし, 両者の音声的休止は等価でなく, 前者の語彙的複雑語の方がより狭い休

止を持っているとみられる。とりわけ、S構造複合語が「[清水氏の発言：終了] 後」のように前項に修飾語を伴う時、両タイプの音声的区切りの違いがより明瞭になる。

そもそも複雑語の構成素間のポーズの違いが、W/W⁺という範疇を区別する根拠になりうるのか疑問である。漢語VNを主要部とする語彙的複合語には、(I)2項間にポーズを置かず一気に発音されるものと(e.g. 情報提供, 現状維持), (II)2項間に少しポーズがあるもの(e.g. 合意形成, 支援要請)の2つのタイプがあることに注目したい。ここでは、構成素間に音声的区切りを持たないタイプⅠ複合語が、Wレベルのものになるのに対し、構成素間に区切りを伴うタイプⅡ複合語は、W⁺レベルの複合語ということになろう。しかしながら、この種のポーズの存否が、形態統語的・意味的に異なる特性を有するW/W⁺の範疇の違いに反映されるとは思えない。ことに、意味的差異を伴わずにどちらのタイプの発音も可能なこともある点や(e.g. 東京での研究に取り組みながらの工場経営はうまくいかず...), 「混雑緩和」「緊張緩和」と「規制緩和」「金融緩和」の音声的対比から示唆される通り、同じ「～緩和」の語彙的複合語でも、後者のように使用頻度が高くなるとタイプⅡからタイプⅠへ移行するといった事実を鑑みて、問題のポーズの違いはW/W⁺の範疇の違いを保障するものではない。

3つ目に、和語のW⁺範疇は存在しないことが示唆されているが(Kageyama (2013: 368-369)), そうなると[図書：貸し出し](= (2a))のような和語VNを主要部とするS構造複合語はどのような扱いになるのか、という疑問が残る¹¹⁾。

S構造複合を名詞編入とみなす議論については、Kageyama (2013)が指摘する形態意味的な主要部標示の諸例が、HM言語特有の現象であるかどうかの検討が今後必要となろう。先に言及した通り、関連する主要部標示の現象の1つは、ある種の項－主要部の呼応が主要部に標示される場合である。例えば動詞句「自分の車を[洗車する]」において、動詞の目的語が必ず車を指すように項の情報が主要部に形態論的にマークされる。ところが、この表現様式は日本語に限らず英語においても観察される。動詞句to body-paint her (Time, March 24, 1986, p. 43)及びto body search them (Jackie Collins, Chances, p. 93)においては、動詞の目的語が必ず人の体を指すように、動詞項の情報が主要部(paint)に結合したbodyによって標示されている。英語がどちらの言語タイプに属するかはNichols (1986)に明記されていないが、この種の標示が言語一般に見られる様式ではないと言えるかどうかは、今後検討を要する問題である。

5. 結び

Shibatani and Kageyama (1988)に始まる一連の研究は、S構造複合語の一群の形態統語的・意味的特性を明示することによって、同複合語が統語論の後の段階で編入によって形成されることを実証しようとするものである。その上で、部門から独立して語形成操作を司る形態理論が語彙部門と統語部門に接近することを可能にする、モジュラー語形成論を立証しようとする。語彙的特性の発掘に重点を置いた当該複合の詳細な事実観察の推進、議論の要となるW⁺範疇のさらなる検討、及び形態理論と2部門との相互関係の制約の解明が、今後の課題として残されている。

注

- * 本稿は、筆者に交付された平成26年度科学研究費補助金基礎研究 (c) (研究課題番号: 26370462) により援助を受けた研究の成果を含んでいる。
- 1) 但し S & K では、後項が漢語 VN のものに限定して議論している (S & K, p. 456)。
 - 2) 略式言葉や新聞の見出し等の特定の文体で例外的に格助詞が省略される場合と (e.g. 「きみ これもう読んだ?」「中曽根首相米国到着」), 複合語内における格助詞の正当な省略を示す当該表現を区別することが重要である (S & K, p. 453)。
 - 3) 本稿では便宜上, S & K 及び他の英語で書かれた論文の例文は日本語で示す。
 - 4) その他に, 「時制の排除」という語の基準が, 節を基底構造とするタイプの S 構造複合語に当てはまる (S & K, pp. 461-462)。
 - 5) その他の非語彙的性質として, 「非登録」の性質がある。語彙的複雑語が実在するか否か (actuality) で区分され, 実在するもののみが辞書に登録されるのに対して, S 構造複合語は実在性の概念に関与せず, それ故辞書への登録も行われない (S & K, pp. 476-478)。
 - 6) 影山 (1993: 37-38) では, 節を動名詞節 (VNP) と時制を持つ節 (IP) に区分する提案がなされているが, 本議論に直接関係しないので, 本稿ではこの点は考慮しない。
 - 7) S 構造複合語は第一姉妹の原則に従って形成されると主張する一方で (S & K, p. 463), 語彙的複合語は同原則に必ずしも従わないと述べているので (S & K, p. 470), 第一姉妹の原則の遵守は複合語一般の特性とは見做せない。
 - 8) 本制限は, 影山・柴谷 (1989: 155-156) において既に言及されているが, 影山 (1993) の方がより詳しい説明を与えている。
 - 9) 2.3 節で議論した S 構造複合の非語彙的特性に照らし合わせて, ②4 類の例が同複合語に該当することを示す必要があるが, ここでは省略する。
 - 10) W^+ 範疇は, 影山 (1996: 338-346) において既に議論されている。
 - 11) W/W^+ の範疇区分に対する疑問は, 両レベルの給与関係にも存在する。②8) のような範疇階層を仮定するなら, W^+ の中に Phrase が通常入り込まないのと同様に, W^+ レベルの操作の終了後に Word レベルの操作は適用しないという, ある種のレベル順序づけを想定することはごく自然なことと言える。ところが, [[クリントン] [前 | 大統領]_{W+}]_W (cf. [クリントン大統領]_W), [[細川] [元 | 首相]_{W+}]_W のように, Word 要素の中に W^+ 要素が含まれるとみられる事例が観察される。

参考文献

- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Di Sciullo, Anna-Maria and Edwin Williams (1987) *On the Definition of Word*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Embick, David (2010) *Localism versus Globalism in Morphology and Phonology*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Horiuchi, Hitoshi (2005) "Post-syntactic Compounding as Case Particle Omission in Mixed Categories," *CLS* 41, 135-148.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房 春日部。
- Kageyama, Taro (2009) "Isolate: Japanese," *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, 512-526, Oxford University Press, Oxford.
- Kageyama, Taro (2013) "Postsyntactic Compounds and Semantic Head-marking in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 20, 363-382.
- 影山太郎・柴谷方良 (1989) 「モジュール文法の語形成論—「の」名詞句からの複合語形成—」『日本語学の新展開』久野 暉・柴谷方良 (編) 139-166 くろしお出版 東京。
- Nichols, Johanna (1986) "Head-marking and Dependent-marking Grammar," *Language* 62, 56-119.
- Shibatani, Masayoshi and Taro Kageyama (1988) "Word Formation in a Modular Theory of Grammar: Postsyntactic Compounds in Japanese," *Language* 64, 451-484.